染飾によるバイロジック表現

美術研究科博士後期課程
工芸研究領域（染織）
s1320914　皆川百合

論文要旨

芸術活動において表現されるものには必ず作り手本人の経験と思考が宿る。筆者も例外でなく、自身の思考を物質変換させた作品を制作することから、筆者の根源的思考を瞭然することが今後の芸術活動における契機になると考えた。

本論文は、筆者が作品制作の手段として用いる「染飾」の造形と、根源的思考であるバイロジック思考を基盤にした「バイロジック表現」を明らかにすることを研究目的とした。

筆者は、染めの現象による「色むら模様」の上に装飾加工を施した作品を制作している。布の深層表現では、染色技法を複合的に扱い「色むら模様」のエポックメイキングを目指す。布の表層表現では、顔料や箔、グリッターなど、化粧を施すように装飾することで、筆者は染め表現と装飾表現の２つの造形意識を作品に内在させる。

本研究では、これまで筆者の表現手段であった「染め」の造形意識と造形のヒエラルキーに窮屈さを覚えたことで自作品の表現方法を再考する必要性を感じ、「染織」の造形意識から見直し、布の「深層」と「表層」にみる素材の特性を確認した上で、双層での作業プロセスから生まれる相互作用した造形の在り方を突き止め、自身の造形は「染飾」であると提示する。さらに筆者の根源的思考を探究すべく、リージョナルな範囲での制作活動から自己分析を試み、これまで筆者が学んできた染織の造形意識、自身の生い立ち、影響を受けた仏教思想に触れながら筆者の根源的思考を探究し、それをバイロジック思考として位置づける。本論文は、筆者独自の造形と、思考を基盤にした「染飾によるバイロジック表現」を理論的に明らかにしたものである。

本論文は、次のように構成した。

第１章では、「染飾」を明らかにするために、筆者が主に扱う「染色」について論じた。日本の「染織」と西洋の「テキスタイル」から、日本の染めの造形意識について述べ、筆者の表現方法である染めの深層と表層を染料と顔料の性質を比較しながら考察した。また布の深層表現になる「色」と「染めの現象」に焦点を当て、筆者の染め表現である「色むら模様」について詳述した。そして、染色技法は布の深層と表層の相互作用関係で成り立ち、双層の表現について述べ、自作品の造形を「染め」を「飾る」＝「染飾」であると提示した。さらに、深層＝染色表現、表層＝装飾表現に置き換えることで、「染飾」を染色と装飾が交わる場所に位置づけた。

第２章では、装飾する行為に惹かれる感覚の行方を筆者の背景にある装飾から紐解き、装飾と染織の関係性を考察した。更に、デザインと装飾の造形意志について触れることで装飾と染織の両者は「いとおしさ」で結ばれていることを論じた。また「飾る行為」と「祈る行為」の結びつきを強く感じてきた自己の体験から、日本の飾る様式美と日本の神仏習合から宗教観を取り上げつつ「飾る精神」と「祈る精神」は「生きる宣言」の同工異曲であることを述べた。

以上の論述から筆者の思考には、事象を二分する思考が働いていることに気付き、その根源的思考を探究して、直感的に二分された事象が流動的に相互作用し、バランスをとりながら調和する思考、つまりバイロジック思考であることを明らかにした。

第３章では、本研究の目的である「染飾によるバイロジック表現」について、筆者の造形を「染飾」と位置づけ、一方的な様式ではなく、直感的に二分した事象が流動的に相互作用する有機的な表現を「バイロジック表現」と定義した。これまでの論考から表現の方向性が明確となったことで、染飾によるバイロジック表現の試作を行い、博士審査展提出作品について取り上げ、終章では、これまでの筆者の経験を振り返り今後の展望を述べ本論文のまとめとした。